

ある登校拒否児の箱庭療法の記録

—こころの王女様の物語—

外山嘉奈子*・高木秀明**

A Study of a case of Sandplay Therapy
for a girl who refused to go to school

Kanako TOYAMA & Hideaki TAKAGI

ABSTRACT

This study reports the process of a play therapy (mainly sandplay therapy) for a eight-year-old girl. The client had refused to go to school, and the cause of her school refusal was that a relationship between her and her parents was weak, with the result that she had lost balance in her mind.

The play therapy had been continued once a week for one year and five months. In the course of the therapy, the client made many sandplay works, and told the story about a work after making it every time.

The theme of the story was about the growth of a princess who didn't have her parents. The princess was cared by the animals in a forest, and grew up healthy. Probably the client must have projected herself on that princess, and could see the mystical unconscious world that people usually experience only in dreams.

Through the sandplay therapy, the client had been healed and her problem was solved.

I はじめに

ここに報告するのは、登校拒否の小学生女子の事例である。筆者が心理臨床の仕事に携わったばかりの頃に出会い、特に箱庭療法を導入したケースとしては初めてのものであった。それだけに筆者にとっては大変思い入れが深い。

ところで、箱庭療法とは、砂の入った木箱の中にミニチュア玩具を置いて作品を作るといふ、非言語的視覚的な表現を用いた心理療法の1技法である。1929年、Lowenfeld, M.

* 横浜国立大学非常勤講師 (Part-time lecturer of Yokohama National University)

** 心理学教室 (Dept. of Psychology)

によって子供の心理治療の方法として考案され、さらに、Kallf, D. M. が Jung, C. G. の分析心理学の考え方を基礎として、成人にも効果のある治療法として発展させた。

さて、Kallf (1966) は自己の象徴体験を重視し、箱庭療法においては「自己顕在化」が十分になされることによってのみ、人格が変容し得ると考えた。自己とは Jung (1967) によれば、「全人格の一体性と全体性を表わす」もので、「意識内容と無意識内容の双方から構成」されており、象徴的には円、四角、円と四角の組合せ、十字架などで表現されるという。こうした象徴表現に至るには、Kallf は第一にセラピストとクライアントの間に「自由にして保護された空間」が作り出されることが必要であるとした。深く積極的かつ守られた治療関係が成立すると、「母と子の一体性」と呼ばれる状況が再現され、クライアント自身の自己治癒力が促され、自己象徴が表現されるようになり、それが人格発展につながるというのである。

日本に箱庭療法を導入した河合 (1969) も同様に、セラピストとクライアントとの関係性について言及し、セラピストにはクライアントの自己治癒力を信頼し、新鮮な感動を覚えながら箱庭を鑑賞する態度が必要であるとした。また、個々の象徴の解釈や理論的な当てはめを行なうことよりも、箱庭の流れを系列的に、あるいは全体的にとらえることに重点を置いた。

当事例では、セラピストとして初心者であった筆者は右往左往しながらも、箱庭を通してクライアントと共にこころの深い世界を旅した感がある。クライアントは箱庭作品を作ることを楽しみながら、かつ確実に自らを癒していった。その内的変容の過程について述べたい。

II ケース概要

<クライアント> A 子、小学2年生の女の子(8才)。

<主訴> 登校拒否。

<来談経路> 登校を渋る A 子の状態を気にした母親が、自発的に当時筆者の在籍した相談機関に来談した。

<治療形態> A 子の遊戯療法(50分)を筆者が担当すると平行して、別のカウンセラーが母親面接(50分)を担当した。

<家族> 父(大卒、サラリーマン、40才)、母(高卒、34才)、姉(9才、小学3年生)、弟(5才、幼稚園生)の5人家族で、両親は職場結婚である。父親は仕事優先のいわゆる「モーレッツ社員」タイプであり、母親は心配性で自分に自信が持てず、育児不安も強い感じの人である。

<生育歴、及び現在の状況>

乳児期にひきつけを起こし入院した。母親はひきつけが心配だったのでしばらくは甘やかして育てたが、3才位からはむしろ厳しく躰けた。感受性の鋭い子で、人の顔色を窺ってから行動するような良い子過ぎる面があった。幼稚園入園後間もなく登園を渋り始め、2、3ヵ月の間は毎朝泣き続けた。小学1年生の2学期にも学校へ行くのを嫌がった。さらに、2年生の2学期から登校直前に泣き始め、登校を渋ることが続いており、母親が学

校まで送っていくことで何とか登校している。

<臨床像>

瘦せ形でひょろっとしており、目が大きい。仕草などから可愛いらしい印象を受けるが、同時にどこか頼りなく装って、誰かの保護を受けようとしているような不自然な感じをも受ける。また、自分から意思表示はしないが、自分の思うことは通したいといった独特の頑固さも感じられた。

III 治療過程

X年3月からX+1年7月までの約1年5ヵ月の間、計53回の遊戯療法を行なった。単独で箱庭療法のみを行なった訳ではなく、他のゲームなども平行して用いられたが、ここでは主に箱庭療法の流れに焦点を当て、治療過程を4期に分けて経過を説明したい。

第1期—1回目(X年3月7日)~10回目(X年5月30日)、箱庭4回

淋しい砂の世界から新しい生命の誕生まで

第1期では、A子はプレイルームの雰囲気や筆者(以下Thとする)に慣れ、曲がりなりにも自分を表現出来るようになるために、時間を費やした。著しい緊張のため、当初はThにリードされないと何も出来なかったが、やがて自己表現の手段として箱庭を選び、こころの作業を開始した。

初回面接では、待合室で母親と別れたA子はThに連れられて、小刻みな、とぼとぼとした足取りでプレイルームに向かい、緊張した面持ちで入室した。何を聞いても曖昧な笑いを浮かべるだけで、自分の気持ちを言葉でも身体でも表現出来ず、Thが遊びに誘っても動けなかった。ThはA子が少しでも和やかに過ごせるように心を砕いた。

○箱庭1(2回目)

2回目では、入室するとすぐ箱庭の木箱をちらちらと眺めた。作ってみたいというサインと感じたThが「やってみる?」と誘うと、「うん。」と小さく返事をした。しかし、いざミニチュア玩具を選ぶ段になると、棚の前で立ち尽くしてしまい、なかなか選べない。A子にとっては、玩具を自分で選ぶということも大変な作業で、その都度Thの視線を気にして、承認されなければ選べないような、おどおどとした様子であった。砂にも一切触れず、選んだ玩具をただ置く形であったが、ようやく作品は仕上がった。日常生活でもこれだけまわりを気にしているのだろうか、Thは胸が痛んだ。

さて、箱庭1は、平らな砂の上にミニチュア玩具が置かれただけの、淋しい作品であった(図1)。しかし、置かれたものは地上と地下とを結ぶモグラ、水中と陸地とを行き来するカエル、地を耕す人(農夫)等、これから始まるこころの作業を予感させるに十分であり、Thは感慨深くそれを見守った。さらに、小さな家が置かれたことも、家、つまりは安心出来る環境を形作ることがテーマであることを窺わせた。

○箱庭2(4回目)

入室すると、視線を箱庭の方に投げかけるので、「作ってみる?」と尋ねると、うなずいた。A子はThの視線を気にして、なかなか玩具が選べなかったが、ようやく木箱の中心よりやや右上にイヌ、クマ、天使を置き、少し離れたところに両手を広げて芸をしているピ

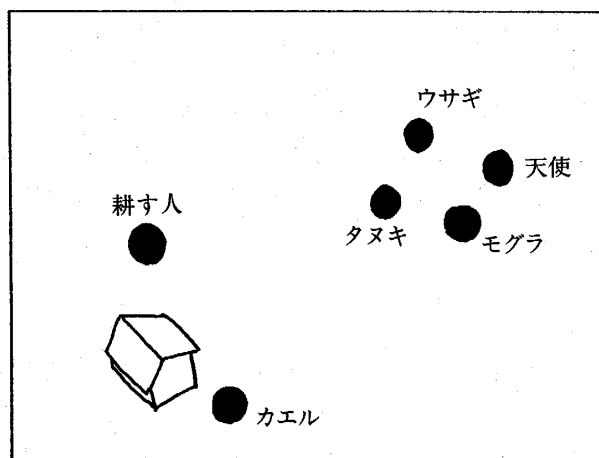


図1 箱庭1

エロを置いた。皆がピエロを見ている感じに配置されていた。どの人形も姿形の可愛い無害なものであるが、4体の人形が凹凸のない乾いた砂の上にぽつんと置かれている様は、どこか死の静寂を感じさせ、強迫的なA子の世界を象徴しているようであった。

ところで、A子は箱庭に興味があり、毎回入室すると箱庭の方を眺めた。やってみいたいというノンヴァーバルなサインであり、自己表現の手段としてぴったりくる感じを持っている様子であった。Thが誘えばA子は早速作り始めるのだが、結局のところ立往生してしまう。そのため、2人の間にラポールが成立していない状態では、作品を作ることがかえってA子に苦痛を与えてしまうのではないかとThは心配した。もう少し時間をかけてA子がセラピーの場に慣れ、本当に安心して作品を作れるようになるまで待とうと判断し、5～8回目はゲームをして過ごした。

○箱庭3 (9回目)

プレイセラピー9回目に入り、A子もその場の雰囲気慣れてきた様子であったので、視線を箱庭に向けた時に、「やってみる？」と尋ねた。

作品はウサギとクマが針葉樹の林でかくれんぼをしている情景で、初めて動きが見られた。隠れているA子をThが探し出そうとしているような、治療場面での2人の関係を、A子が象徴的に表現しているように感じられたため、Thはこの時点で、箱庭を通してA子と深くかかわってゆけそうな感じを持った。

○箱庭4 (10回目)

中心にある卵とヒヨコに向かって、沢山の登場人物が集まってくる情景が描かれた(図2)。それまでほとんど話さなかったA子が、箱庭の説明を長々としたのが印象的であった。

「お爺ちゃんとお婆ちゃんがひよこを見に行こうって話してて、女の子は『私も見に行こうかなあ』って思ってるの。モグラは土の中をもぐって、ヒヨコの所まで来たんだけど、1匹は場所を間違えちゃったの。ウサギは走って見に行こうとしてるの。ミッキーマウスはね、ヒヨコに花をプレゼントしているの。タヌキは生まれたばかりのヒヨコを撫でて、『いい子、いい子』って言ってるの。ガッチャン(註『ドクターランプ』というマ

ングの登場人物で、まだ赤ちゃんであるが、大食漢で何でも食べてしまう) はね、ヒヨコとお話してるの。」

劇的な誕生のシーンである。Thも実際にヒヨコの、もっと言ってしまえばA子自身の誕生に立ち合ったような、心の震えるような感動を覚えた。ヒヨコは誰かの援助なしでは生命さえも危ぶまれるように見えたが、祝福に駆けつけた皆に守られて成長してゆけそうな予感を、Thは抱いた。

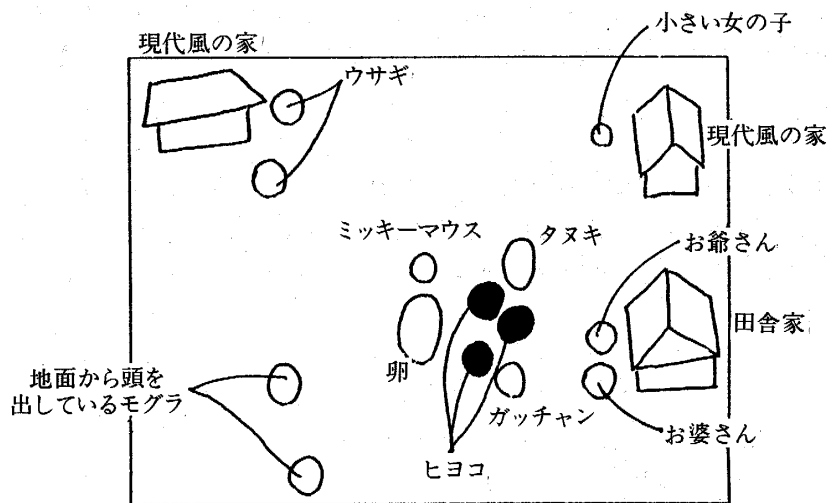


図2 箱庭4

第2期—11回目(X年6月6日)~27回目(X年11月7日), 箱庭14回

皆に守られて、すくすくと成長する王女様

第2期においても、現実生活ではA子は朝になるとメソメソと泣き始め、登校を渋り、母親に送られて学校へ行く状態が続いた。

箱庭療法の過程では、時に普通の女の子、時に王女様の姿をした人形を選び、主人公に据えていた。王女様や女の子はプレゼントをもらったり、芸を見せてもらったり、食事を与えられたりして、まわりの者に大変良く面倒を見てもらっている。大事にされ、楽しい思いをすることで、王女様は力を貯えていくようであり、それによってA子自身がエネルギーを充電しているようであった。

○箱庭5(11回目)

11回目には、以前より歩き方がしっかりとしてきた様子が見て取れた。箱庭では、パンダやコアラのいる動物園をつくり、それぞれの動物を見ている人物が置かれた。お爺さんとお婆さんが手をつないでゾウを見ている場面があったので、Thが「仲が良いね。」と言うと、ぱっと明るい顔をしてくなずいた。A子とThも、箱庭を通して少しずつこころの交流が出来るようになっていた。

○箱庭6(12回目)

A子はようやくThの目を気にすることなく、箱庭を作ることが出来た。その安心感から

か、箱庭の左下の砂を掘って小さな池が出来ている。1期と比べると、2期では箱庭が随分と賑やかになった。A子の説明は以下の通りである。

「ウサギは木を見ていて、モグラは地面から出て来て、果物を見てるの。ピエロとゴリラは芸をしているの。女の子はね、それを見てるの。」

○箱庭7 (13回目)

ネコと魔法使いを中心に、ウサギやモグラが丸くなって集まっている場面が作られた。A子は「ネコが芸をしているのを皆で見てるの。魔法使いは『僕は何でも出来るんだぞ』って言ってるの。」と語っている。前の2回同様「見る」ことがテーマとなっているが、ネコと魔法使いを核として中心化が起こっており、こころの世界に少し変化が起き始めていることが予想出来た。

○箱庭8 (14回目)

箱庭の右側の3分の1位を掘り下げて、晴れ晴れとするような、大きな海が出来上がった(図3)。「大きな海だねえ。」とThが言うと、A子もにっこりと笑った。この箱庭では、今まで見てばかりいた女の子もウサギも、しっかりと食事に有り付いている。

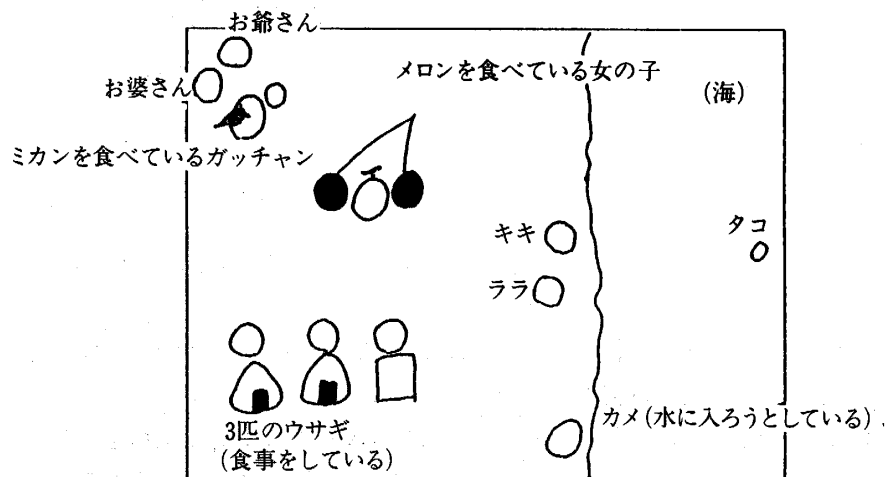


図3 箱庭8

○箱庭10 (18回目)

この回ではA子は夏休みに入っており、日焼けして、一段と活動的になった印象を受けた。箱庭では王女様を囲んでネズミや魔法使いが集まっており、白馬が王女様に花束を渡している場面が描かれた。ここでも中心化が見られた。

○箱庭11 (19回目)

いかにも満足そうな顔をしてA子が作り上げた箱庭では、女の子のまわりにウサギが集まって、プレゼントを渡している。A子は「お誕生日をしてるの。」と話したが、現実にもA子のお誕生日会があったということで、プレゼントをもらっている女の子は明らかにA子自身と推測された。

○箱庭 12 (21 回目)

学校が始まり、大分疲れている様子が見て取れたので、「元気がないんだね。学校始まって、疲れちゃったかなあ。」と言うと、少し笑ってうなずいた。しかし、箱庭では、皆がダンスを踊っているシーンが登場しており、現実適応には苦慮している A 子のこころの内側では、随分と賑やかで楽しい世界が展開していた。王女様と王子様、お爺さんとお婆さん、ミッキーマウスとピエロなど、多くの登場人物が 2 人 1 組となって踊っている。

○箱庭 14 (23 回目)

「運動会のかけっこなの。」という箱庭をつくる。カエル、クマ、白馬、パンダが皆が観戦している中で徒競走をしているが、場面の中央でパンダが派手に転んでいる。転んでいるのは A 子の大変さの現われと受け取れたが、Th には同時に、強迫的で用心深く自分をガードしていた A 子が、失敗さえも受け入れられるようになったと感じられた。

箱庭終了後に Th がオセロに誘うと、初めてはっきりと「嫌。」と拒絶する。A 子自身が選んだゲームで 2 人で楽しく遊ぶ。

○箱庭 15 (24 回目)

ミッキーマウスや天使、ピエロ、ウサギ等の沢山の登場人物がステージで演技を披露しており、白雪姫がそれを見ている(図 4)。王子様と王女様は白雪姫に花束を渡そうとしており、皆が総出で白雪姫を歓迎しているようであった。クラッカーまで用意され、破格の歓迎ぶりである。A 子は白雪姫を指し、「この子はね、一番偉い子なの。」と語っている。いつもは最も大事にされている王女様のところへ、それよりも偉い白雪姫が訪れたことについて、Th は白雪姫はセルフの象徴的表現なのではないかと考えた。

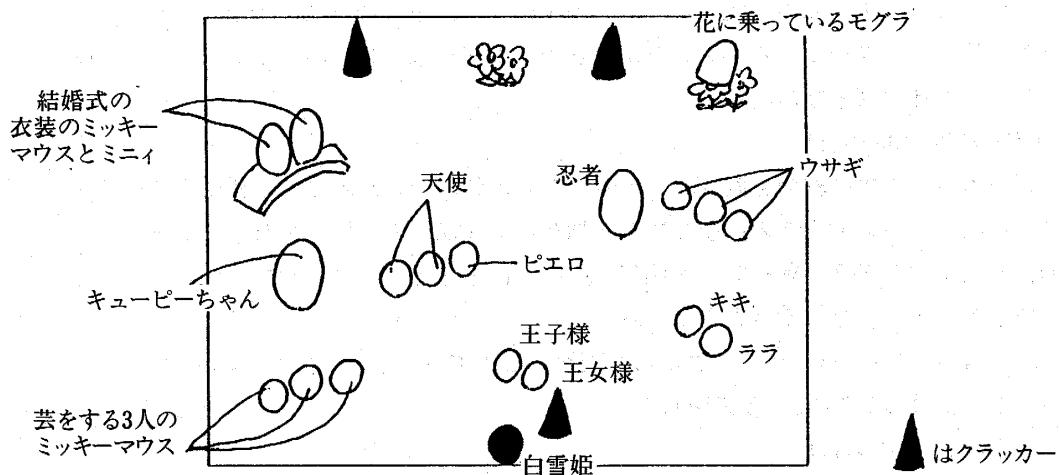


図 4 箱庭 15

○箱庭 16 (25 回目)

箱庭ではクマの送別会が行なわれている。「この子がね、別の森へ行くので、お別れしての。」と A 子が説明したクマは、箱庭 3 でウサギとかくれんぼをしていたクマであり Th

のイメージが投影されたものと思われた。A子のこころの世界で、王女様の世話を焼く役割を担っていたクマが不要になったということは、それだけ王女様の力が増したのであろう。A子の箱庭の世界では、第2期の仕事が一段落したようであった。箱庭以外でも自分から進んでゲームを選んで元気に遊べるようになった。

○箱庭 18 (27 回目)

公衆トイレと男性用便器をしげしげと眺め、公衆トイレの方を選んで箱庭の左下の角に置く。それまでなるべく可愛い、無害な道具を選んでいたA子が、初めて汚いものを自分の世界に取り入れた。

第3期—28回目(X年11月28日)～41回目(X+1年4月3日)、箱庭13回

天地を結ぶモグラの登場と学校場面での活躍

第3期では、現実生活ではA子は母親に送ってもらわなくとも、登校班の仲間に入って登校出来るようになりつつあった。

箱庭では、王女様の家来で天から降りて来たモグラの活躍が著しい。モグラ達は王女様を助けるばかりか、学校へも出かけて行くようになり、しばしばモグラが子供役の学校の場面が登場するようになる。モグラの力を借りて、A子は学校というものをこころの中に取り入れようとしているように見えた。そうした動きと前後して、中心化も見られた。

○箱庭 19 (28 回目)

貝を遊園地のコーヒーカップに見立てており、その上にウサギを乗せた。1つ1つの貝の側には、モグラを貝を回しているような形で置いた。さらに、砂におはじきをちりばめて、海の底のような世界を作った。箱庭の上部の中央では、王女様が白馬から花束をもらっており、王子様がそれに付き添っている。A子は以下のように説明している。

「今日はね、王女様のお誕生日なの。王子様はね、王女様を馬に乗せてあげようとしてるの。皆はね、コーヒーカップで遊んでるの。モグラはそれを回してあげてるの。モグラはね、王女様の家来なの。」

○箱庭 20 (30 回目)

箱庭の右上の角に教会を置き、その隣にワニの顔のついた階段を木枠に立てかけるようにして置く。パンダやタヌキなど様々な動物が王女様と王子様のまわりに集まっており、動物の上にはモグラが乗っている(図5)。A子によると、モグラが帽子代わりになり、皆で帽子とりゲームをしているそうである。

A子はさらに、「モグラさん達がね、天からこの階段(右上のワニの階段)で降りて来たの。それで遊んでるの。」と説明している。

○箱庭 21 (31 回目)

この回では、教室の場面が作られた(図6)。4匹のモグラが太鼓や笛を持って音楽の発表をしており、他のモグラ達は席についてそれを聞いている。先生はタヌキである。A子は「あのね、モグラが音楽の授業でね、自分達のやったことを発表してるの。」と話しており、「楽しそうだね。」とThが言うと、嬉しそうに笑った。さらに、1匹のモグラを指して、「この子はね、おしゃべりをしていて、先生に怒られちゃったの。」と付け加えた。

○箱庭 26 (36 回目)

回の最初に目が合い、A 子はしっかりとした明るい笑顔を見せた。学校へも順調に通っており、力がついてきた様子が見て取れた。

箱庭では、タコ壺に入ったタコのまわりに、モグラや女の子、他の動物達が集まっている。お爺さん、お婆さんもあり、タヌキとウサギがこれらの老人を支えている。

「タコが空から降って来てね、皆びっくりして見に来てるの。お爺ちゃん、お婆ちゃんもびっくりして気絶しちゃった。」

予期せぬ出来事が起こり、お爺さんとお婆さんは気絶してしまっただけらしい。小動物に助け起こされ、支えられてようやく立っている。A 子の箱庭に時々登場するお爺さん、お婆さんはこんなに頼りない存在なのかと、Th は驚きをもって眺めた。

○箱庭 27 (37 回目)

箱庭の木枠にそって家や針葉樹が配置され、田舎家の前にお爺さん、お婆さんが立っている。中央では女の子やウサギ、ネズミ、タヌキなどの動物が沢山集まって、2人1組で棒を持って火を囲んでいる(図7)。今までのものより規模の大きい中心化が見られた。中心にある火は大きく赤く、Th は力強いエネルギーを感じ、A 子のこころの中に何かどっしりとした拠り所のようなものが出来上がったような、大変良い印象を受けた。

「今日のはね、どんど焼きの日で、皆でやってるの。」と A 子は説明し、楽しそうに自分がどんど焼きに行った時の思い出を話しており、現実生活での充実ぶりが見て取れた。

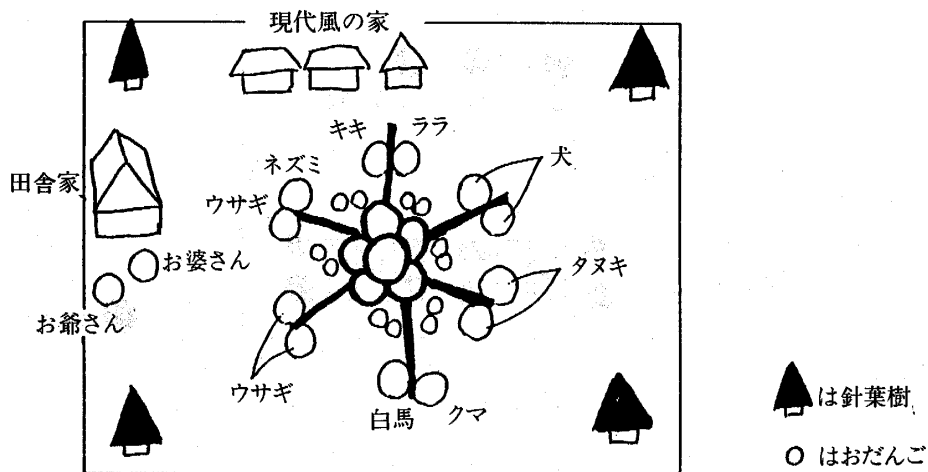


図7 箱庭 27

○箱庭 29 (39 回目)

箱庭では、卒業式の場面が登場する。A 子によると、卒業生はリス、パンダ、ゾウで、リスがタヌキの先生から卒業証書を受け取っている。モグラや他の動物は下級生として整列して、それを見ている。時期的にも卒業式シーズンで、A 子自身が学校で体験した事柄を表現したものと予想出来たが、それと共に、A 子のこころの中でも、一区切りなのであ

ろうと Th には感じられた。箱庭 30, 箱庭 31 でも, タヌキの先生とモグラの子供の学校場面が作られ, モグラは学校生活を楽しんでいる。

第 4 期—42 回目 (X+1 年 4 月 8 日) ~53 回目 (X+1 年 7 月 30 日), 箱庭 11 回

守りとしてのお爺さん, お婆さんの出現からお母さんの登場へ

第 4 期に入ると, A 子は学校へもスムーズに行けるようになり, 日常生活を楽しめるようになった。6 月あたりからは, もう Th の元に通わなくとも良いと, 母親に語り始めていたため, 7 月末で終結することが決められた。

さて, 箱庭の世界では, 王女様を助ける存在はモグラやウサギといった動物から, お爺さん, お婆さんといった人物にバトンタッチされる。さらに, 箱庭に家が多く置かれるようになり, 終結近くになって, 場面は森や田舎の風景から一転して町へと移された。

○箱庭 32 (42 回目)

箱庭の中心には, 寿司を囲んで王女様, 王子様, 3 匹のウサギ, 白馬が集っている。左上の角には岩が置かれており, そこには 2 匹のタヌキと一緒に お爺さん, お婆さんが立っている。他の 3 つの角には家が置かれている (図 8)。Th には, この家々には今まで置かれた家とは違い, どこかどっしりとした磐石のものという印象があった。

「今日は青いウサギの誕生日でね, 皆でお祝いしているの。タヌキは知らない子でね, 『いいなあ, 入れてほしいなあ』って, 見てたの。そうしたらね, お爺ちゃんとお婆ちゃんが迎えに行っってね, 『どうですか, 仲間に入りませんか』って言ってるの。ウサギさん達は一緒に新しいお家に住んでね, お爺ちゃん達は古いお家に住んでるの。」

今までも家が置かれることはあったが, この回では, A 子の説明からちゃんと住人のいる, つまり安心出来る場所としての家が登場した。そして箱庭 26 にあるような, 驚いて引っ繰り返ってしまう頼りない存在ではなく, しっかりと子供の面倒を見てくれるお爺さん, お婆さんが登場し, A 子の箱庭が秩序立ってきたような印象を受けた。それは A 子のこのころの安定とつながっているように思われる。

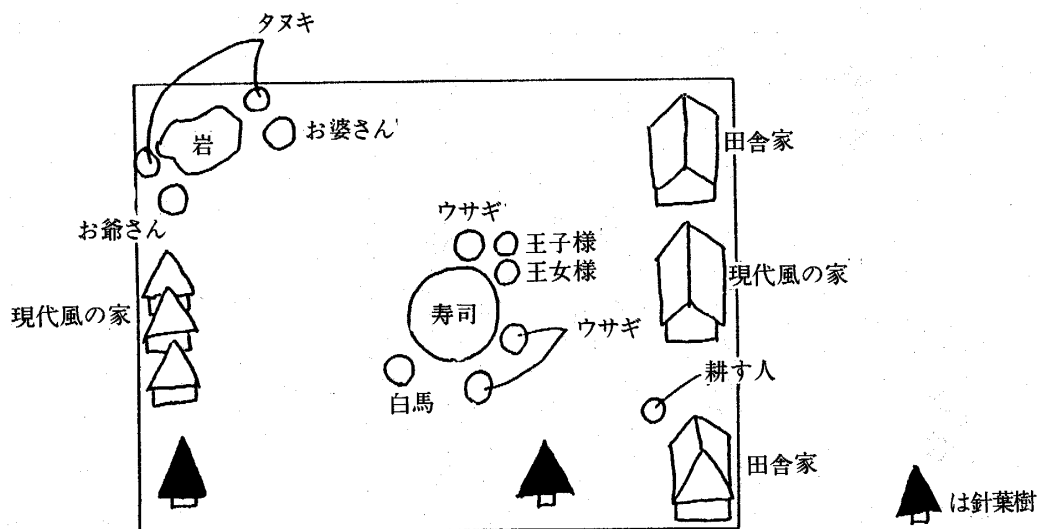


図 8 箱庭 32

○箱庭 35 (45 回目)

箱庭の左下に田舎家があり、右下には新しい家が立っている。中央より右下よりに、お爺さん、お婆さん、女の子、ウサギ、タヌキ、白馬が集まっている。場面の左上には林があり、右上の角には池がある。Thには落ち着いた田舎の風景に思われた。

「お爺ちゃんとお婆ちゃんが引っ越してきてね、イヌも一緒に。それでね、皆でお迎えしてるの。池の鳥は皆で飼ってるの。」

○箱庭 38 (48 回目)

箱庭 34, 箱庭 35 と同じく田舎の様子が作られた。「今日はね、クマがお友達を連れて、お爺ちゃん、お婆ちゃんの所に遊びに来てね、今、お友達を紹介してるの。」と A 子は説明している。さらに、いつも用いるお爺さん、お婆さんの他に、仙人の姿をした人形も置かれた。「このお爺ちゃんは？」と仙人を差して Th が尋ねると、A 子は「このお爺ちゃんはね、村の人達をいつも暖かく見守っているお爺ちゃんなの。」と述べている。箱庭 39 でも森の様子が描かれ、ずっと森や田舎での生活がテーマになっている。

○箱庭 40 (50 回目)

箱庭の右上の角に置かれたガソリンスタンドには、バイクが 2 台給油のために止まっており、リーゼントヘアの男の子達が話している。その並びには電話ボックス、ポスト、お店、ホテルがあり、今までとは一転して繁華街の様子が現われた。男の人や子供達、そして赤ちゃんを抱いた女の人も置かれた。中央には道路があり、トラックや救急車、乗用車などが走っており、流れはスムーズである。道路に隔てられた箱庭の左側ではタヌキ、白馬、クマ、お爺さん、お婆さんが並んで立って町を見ている(図 9)。左下には 2 人の女の子が座っている。

「今日はね、この子達(タヌキ、クマ、白馬)がね、町の様子を見にきたの。今は『すごいなあ』って言って、見てるの。お爺さん、お婆さんはね、この子達がうろうろしてい

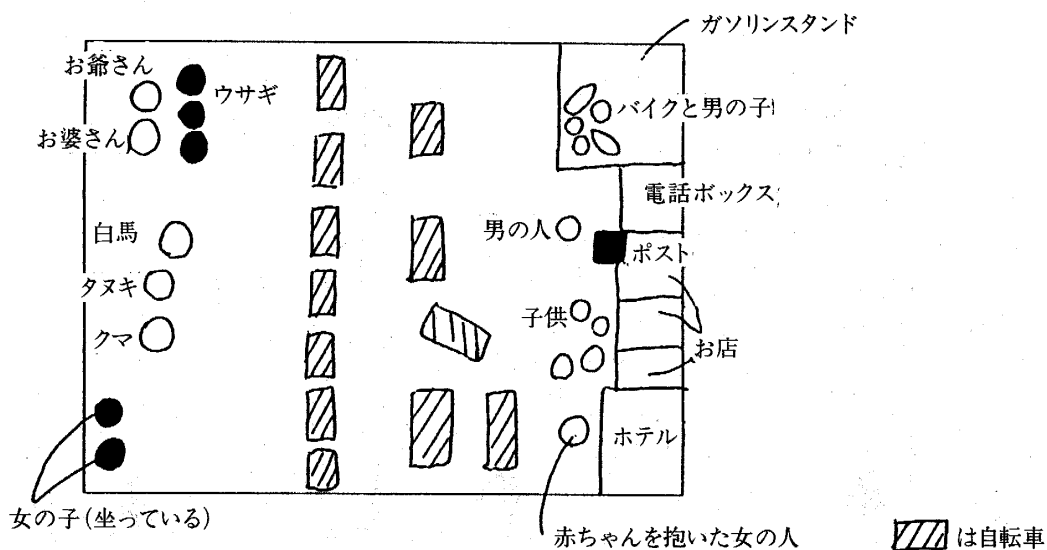


図 9 箱庭 40

たからね、『どうしたの?』って聞いているの。女の子は疲れて座っているの。』

終結を前にして、子供達はこころの世界の森の中から出て、A子が現実に住んでいる町までやって来たのだと、Thには感じられた。彼等は急に都会に出たため、闇の中から光の下に出た時に感じる眩しさに似た戸惑いを抱いているようである。女の子に至っては、疲れて座り込んでしまっている。だが、大きなガソリンスタンド、つまり十分なエネルギー補給基地があるため、戸惑いと不安はあるようであるが、A子は何とか頑張れるのではないかという感じをThは持った。

○箱庭 43 (53回目)

「こんにちは。」と大きな声で言い、しっかりと頭を下げる。今までにないことであったので、A子は終結を意識しているのだと感じる。箱庭を作ることになり、Thが「最後だね、どんなのが出来るのかな。」と言うと、にこにここと笑って自信あり気にしている。

まず、左上にホテルが置かれた。その下にプールがあり、タヌキとパンダの小さな人形がプールの中に置かれ、タヌキの大きな人形がそれを見ている形で置かれた。芝生を経て門を過ぎると道路があり、車が整然と並べられている(図10)。内と外との混乱がなく一応の整理がついた印象である。

A子は、「タヌキの親子とパンダの親子がホテルに泊りに来ててね、子供達がプールで泳いでいるの。それをタヌキのお母さんが見てるの。」と説明を加えた。これまでも、母親イメージを投影したものではないかと思われる人形を置くことはあったが、A子が説明の中でお母さんという言葉を使ったのは初めてであったので、Thは嬉しく受けとめた。子供達とお爺さん、お婆さんの住む世界に、お母さんも登場した訳である。Thはほっと安心し、「今日で終わりだけれど、何かあったらまた来てね。でも、A子ちゃんは元気になったから、もう大丈夫だよね。」と語った。A子は「ウフフ。」と明るく笑った。

別れ際に「さようなら。」とThの目を見てしっかりと挨拶し、A子は箱庭の世界から巣立っていった。ThはA子のこころの世界に、優しいタヌキのお母さんがどっしりと腰を据え、王女様の成長を見守り続けてくれることを、心の底から祈った。

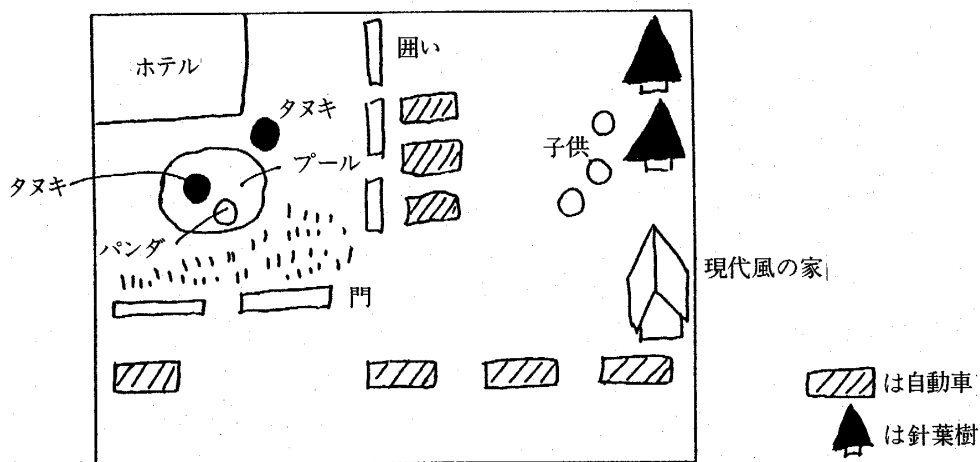


図10 箱庭 43

IV 考 察

1. 登校拒否の意味

A子は登校拒否の症状を出すことで、家族との関係、特に母親との関係を見直そうとしたのではあるまいか。父親は仕事熱心であるが故に、子供については母親に任せ切りであり、母親にも育児に対してどこことなく拒否的な部分がある。幾分暖かさに欠ける家庭の中で、それでも他の兄弟は大きな問題はなく育っていったが、生れ付きの感受性の鋭さやある意味での脆弱さのためか、A子は母親の顔色を窺いながら、良い子であろう、好かれようとしてきたようである。織田(1993)によれば、人間の見捨てられ感情は元型的なものであり、「誰の心の中にも存在するもの」であるが、A子の場合、母親に見捨てられるのではないかという大きな不安があったと考える。A子にとって母親は、自分のすべてを受け入れてくれる存在ではなく、良い子ならば愛してくれる、言わば条件付きの存在であったのかもしれない。

河合(1977)は、「子どもは成長するために、まず母親に包まれ、絶対的というべきほどの安全感を得なければならぬ」としているが、おそらくそうした体験の乏しかったA子は、生きる上での基盤の不安定さ故に、健康な自我が育っておらず、流れの激しい競争社会である学校生活に適応出来なかったのであろう。登校拒否の症状を出すことで自身も一時的に退行し、さらには母親の関心を自分に向けさせることで、A子は自身が安心出来る母子関係を作り直そうとしたように考察出来る。

2. 箱庭療法の過程

A子は自らの意志で毎回のよう箱庭作品を作り、こころの物語を展開していった。筆者には、A子があまりにも頻繁に作品を作り過ぎたのではないかという疑問もあり、セラピストとしてももう少し配慮が必要であったと反省している。だが、無意識の世界からのメッセージを受け取る力に長けているA子には、箱庭療法は最適な治療法であったろう。その過程について考察を加える。

(1) 第1期

第1期では、A子は筆者との友好的な関係を成立させるための慣らし期間を経て、こころの旅に出発したようである。箱庭1、箱庭2では、漠とした砂の上に幾つかの人形を置いただけで、A子は砂に触れることすらなかった。淋しい砂の世界からは、母なる大地が生命を育むことを拒否しているのではないかと連想させられた。河合(1970)は、母性にはあらゆるものを呑み込んでしまう否定的な側面と、すべてのものを産み養育する肯定的な側面があるとして、母性の2面性を指摘しているが、この時点では、A子の箱庭では母性の否定的な面が強く表現され、A子の心的現実の厳しさが感じられた。

しかし、自らを癒そうとするこころの動きはすでに始まっていた。箱庭4ではヒヨコの誕生が見られるまでになっている。ヒヨコの誕生は即ちA子の自我の誕生であり、彼女の生き直しの始まりを意味している。筆者は、A子は前述の「母なるものに絶対的に守られる体験」を求めて、誕生のシーンを作成したのではないかと考える。だが、卵からかえっ

たヒヨコには親鳥がいます、安心して頼るべき対象のない不安定さは、A子の現実の苦しさやつらさをも十分に代弁しているようである。けれども、親の不在を補うべく、森の住人達が駆け付けて誕生を祝っており、以後はお守り役として機能する。

(2) 第2期

第2期以降では、A子は女の子や王女様に自分のイメージを重ねていたようである。女の子の方がより現実のA子像に近く、王女様には象徴的な意味合いが強いが、どちらもA子の自我の表現であることには違いあるまい。

さて、箱庭4のヒヨコ同様、これらの主人公（以下王女様と統一して述べる）の親も一切登場していない。ミニチュア玩具の棚には、成人男女の人形が何種類か置かれており、使おうと思えば使えるのであるが、A子はそれらを選択しようとはしなかった。王女様は言わば孤児のような状態であるが、親代わりの動物達を得て、その愛情を一身に受けて育てゆく。ウサギ、クマ、ミッキーマウスの魔法使い、ピエロ等の森の住人は、それぞれの小さな力を結集して、王女様を動物園や海に連れて行ったり、芸を見せて楽しませたりと、ちょうど幼児期に親が子供にするように、一生懸命に面倒を見ている。第2期以降に何度も王女様の誕生日のシーンがあるのは実に興味深く、誕生日毎に王女様は年令を重ねていったように感じられる。

さて、箱庭では普通言語的なかわりを必要としないが、A子の場合、作品を作り終える度に、自ら物語を語るというのが特徴的であり、筆者もA子を理解する上で、与えられた情報に随分と助けられた。箱庭15では、A子は場面の中で最も偉いのは白雪姫であると語っており、筆者には自己（セルフ）イメージに近いものと受け取れた。河合（1967）は、「自己も人格化されることがあり、この時は超人間的な性格をもった姿をとる」と述べている。自己は幾何学的な象徴として表現されるのみならず、同性の人格像をもとるのであり、女性においてはそれは至高の女神や老賢女、永遠の少女といった姿となる。A子はお伽話の主人公である白雪姫を選んだが、これも無意識の象徴的な世界と根源的なかわりがあると考えられる。それ以前の箱庭7、箱庭10でも中心化が見られており、徐々にこころの変容が生じている様子が見取れる。

第2期では王女様の力、つまり自我の力は随分と貯えられ、自己とのかかわりをも持ちながら発展していった。貯えられた自我の力に支えられて、第3期に入ると、箱庭の主な場面は学校へと移行してゆく。

(3) 第3期

第3期に活躍が目立ったモグラは、トリックスター的な色彩が強い。山口（1986）によれば、トリックスターは「天と地をつなぐ」仲介者的な存在であり、否定的要素を再統合する役割がある。人は無意識の世界からの使者であるトリックスターを通して、「捨てられ、忘れられ、無価値とされてきたものに意味を見出す術」を学ぶのである。さらに湯浅（1984）は、トリックスターの役割の1つに、人間社会の秩序や聖なるものの価値を切り下げることをあげている。つまりは良きにつけ悪きにつけ、すでに評価の定まった事柄の価値を再評価し、硬直した世界の突破口を見出すことが、トリックスターの役割と言えよう。それ故、トリックスターは、反道徳的、破壊的な性質をも帯びている。

箱庭 20 で天から降りて来て王女様の家来になったモグラには、強烈的な破壊性はなかったが、やはり A 子の意識と無意識の間をつなぐ使命を担い、彼女の学校に対する価値観の变革をはかる務めを果たしたようである。モグラは A 子の忌避の対象である学校へ行き、授業中におしゃべりをして先生に怒られたりして、その悪戯ぶりを発揮する。彼等の学校生活は実にのびのびと楽しげであり、A 子の現実の大変さを考えれば雲泥の差である。A 子のこころの奥底にある新しい可能性の萌芽が、モグラを動かしたのではあるまいか。

そうしたモグラの活躍と前後して、箱庭 27 では大きな中心化が起こり、祭りの中でどんど焼きの火を囲むという形で、自己の象徴化が起こった。この火は視覚的にも大変エネルギーに見えたが、どんど焼きの火には同時に前年の汚れを落とし、その年の無病息災を願う浄化の意味がある。A 子のこころの中で何かが浄化され、何かが大きく変容したという感じが見て取れた。

(4) 第 4 期

自己の象徴化の結果、箱庭の世界では、住む人のいる安心出来る家が登場するようになり、お爺さん、お婆さんが王女様や動物達の保護者として機能するようになった。それまでは偶然その場に居合わせたり、動物に助けられたりしていた老人達は、第 4 期に入ると子供達を積極的にサポートするようになる。そればかりか、箱庭 35 では近くに引っ越して来て、隣人として振る舞うようになった。王女様は動物ではなく、もう少し次元の高い人間の姿をした保護者を得た訳である。さらに箱庭 38 では、村の人を暖かく見守ってくれる仙人も登場し、筆者には老賢人のイメージとも感じられた。A 子は自身のこころに安定した基盤を得たと言えよう。

さて、終結を間近に控えて、王女様と仲間達は森に別れを告げて町へとやって来る。王女様は無意識に近いこころの深い世界から、より日常生活に近い世界へ出てきたことになる。箱庭 40 では、森の一行が道路を隔てた左側におり、右側の町の様子を眺めている。場面の左側を無意識の世界、右側を意識の世界とする箱庭療法の解釈方法から考えても、この箱庭は実に意味深い。また、大きなガソリンスタンドも置かれており、A 子のこころのエネルギーが十分であることが窺われた。最後の箱庭（箱庭 43）では母親グヌキが登場し、子グヌキ達の遊ぶ様子を優しく見守っている。A 子の表情にも、ようやく母なるものの守りを獲得した安心感と満足感が見て取れた。

だが、A 子にとって両親のイメージとは、どこか祖父母に近いような、心理的距離の遠い存在なのかもしれない。両親に対するイメージは、箱庭に登場したお爺さん、お婆さんにも投影されていると考えられる。当初は王女様とほとんど交流のなかった彼等も、最終的には世話を焼いたり助けてくれたりする存在となったが、河合の言う絶対的な安全感を保障してくれるには力不足で、どこか不安定さが付きまとう。そうした弱い基盤の上でどう生き抜いてゆくかが、A 子の今後の課題となろう。

3. こころの王女様の物語の普遍性

A 子のケースは終結以来すでに何年もの年月が経過しているが、時を経て振り返ってみても、箱庭に表現された心的過程のドラマ性は少しも色褪せていない。それは、A 子が無

意識の深淵から汲み上げたところの王女様の物語が、彼女固有のものであると同時に、普遍的なモチーフをも含んでいるものであったためであろう。親に疎まれて捨てられたり、止むに止まれぬ事情があって親と生き別れたり死に別れたりした子供達が、老人や動物達に助けられ、数々の試練を乗り越えて幸せを勝ち取ってゆく物語は、古今東西を問わず親しまれているものである。

A子の場合、勿論現実に親に捨てられた体験はないが、心理的な結びつきの希薄さ故にある時期ころの中では親がいないうちに等しい体験をしたのであろう。登校拒否の症状が出てからの、A子に対する母親の努力によるどころも大きいですが、A子自身も箱庭を通して普遍的な主題を再現するうちに、バランスの崩れたところの世界に均衡を取り戻し、自らを育てていったと言える。特に、自己（セルフ）の表現ともおぼしき白雪姫の人形を箱庭に置いたことや、森で人間とは異なるものに養われたというストーリーの類似性から、筆者には、A子の物語と白雪姫のモチーフとの関連性が強く感じられた。

最後になるが、分析心理学では、お伽話や民話、童話、あるいは神話のモチーフが、人類の普遍的無意識の領域から汲み出されたものと仮定されている。そのため、そうしたモチーフの研究も多々なされているが、それは多くの傷付きを持った現代人のころの癒しのために大きな意味を持つのではないかと、A子の箱庭の物語から、筆者は改めて感じさせられた。

引用文献

- Jung, C. G. 1967 *Psychologische Typen*, Rascher Verlag. (林 道義訳 1987 タイプ論 みすず書房)
- Kallf, D. M. 1966 *Sandspiel-Seine therapeutische Wirkung auf die Psyche*, Rascher Verlag, Zurich und Stuttgart. (河合隼雄監修, 大原 貢・山中康裕訳 1972 カルフ箱庭療法 誠信書房)
- 河合隼雄 1967 ユング心理学入門 培風館
- 河合隼雄 1969 箱庭療法入門 誠信書房
- 河合隼雄 1970 カウンセリングの実際問題 誠信書房
- 河合隼雄 1977 「母性について」 河合隼雄・藤田 統・小嶋謙四郎共著 母なるもの 二玄社 pp.151~179.
- 織田尚生 1993 昔話と夢分析 創元社
- 山口昌男 1986 道化的世界 ちくま文庫
- 湯浅泰雄 1984 歴史と神話の心理学 思索社